TAMABI NEWS

Tama Art University News Magazine

vol. 94

映像で魅せる力

企業人事・卒業生に聞く

サンリオ／資生堂クリエイティブ／積水ハウス

映像で魅せる力

多摩美術大学には映像学科はありませんが、映像の分野で活躍するクリエイターを数多く輩出しています。どのような課題を通じて映像表現を学んでいるのか、どのような環境が映像制作を後押ししているのか、映像で魅せる力が磨かれる理由に迫ります。

課題

三文字の言葉を大切に考える。
その言葉と映像を観た人を、ぎゅっと優しく、泣かせてください。悲しませてはいけません。感動の涙です。

■ 自分の心が動くものと向き合い、それを伝える力を育む

情報デザイン学科 情報デザインコース 2年「演出表現演習」
担当：林響太朗 先生

心に届く映像には伝える意思が宿っている

自分が学生に教えられるものは何かと考えたとき、映像を通じたプレゼンテーションの手法であれば共有できるのではないかと思い至りました。つまり、映像によって人に何かを伝えるための演出技法です。同時に、自分の好きな表現を実践的に突き詰めてほしいとも感じました。「演出表現演習」という授業名には、そうした思いが反映されています。

この授業の集大成となったのが、「3文字の言葉から映像を制作し、観た人に感動を与える」という課題です。大きな制約は設けず、アニメや実写、CGなど、自分の好きな表現を追究してもらう形にしました。私が仕事をする中で実感しているのは、好きなものに対する熱意が創作の原動力になるということです。「なぜ好きなのか」という理由を深掘りし、その魅力を誰かに伝える。学生にはそんな映像を制作してほしかったんです。この課題に対し、私は教えるというよりも、より伝わりやすくなる工夫を一緒に考えるようなスタンスで対話を重ねました。また、撮影・録音の技法や編集機材の使い方といった技術面についても個別にレクチャーしていました。

また、映像の構成や演出についても丁寧に伝えました。映像の前半には何を表現したい作品なのかを明確に伝え、惹きつけるための仕掛けが必要ですし、後半には感動まで持っていくための流れを考えなくてはなりません。そうした「伝えるための演出」は重点的に学

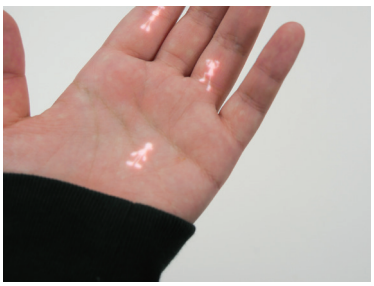
んでもらいました。

完成した作品は、私の想像をはるかに超えるものばかりでした。企画段階でグッときたものも多い中、映像化することによってさらにメッセージが際立っていると感じたんです。いい映画や音楽に触れたときって、思わず人に話したくなりますよね。そんなふうに、誰かと共有したくなる作品かどうかという点を指針にして評価を行いました。

自分の大学時代を振り返ると、すべての学びが現在の仕事に役立っていると感じます。学生にできる限界はあるものの、その中で作品を制作し、人に観てもらう喜びを知ることができました。映像の美しさと観た人が驚くような仕掛けを組み合わせれば、より多くの人に伝わりやすくなる。そうした多摩美での発見が、私の映像制作の土台になっています。学生の皆さんには、とにかく作品を完成させて人に観てもらう経験を重ねてほしいと思います。その経験が豊かな表現力を育み、人に伝わる映像をつくる上で、大きな力になってくれるはずです。

多摩美術大学情報デザイン学科情報デザインコース卒業後、図画工作を活動の理念としたクリエイティブカンパニー「DRAWING AND MANUAL」に参加。Mr.Children、星野源、米津玄師、あいみょんなどのMVを制作、CMも数多く手掛ける。2016年にヴェネツィア・ヴィエンナーレ特別賞を受賞。

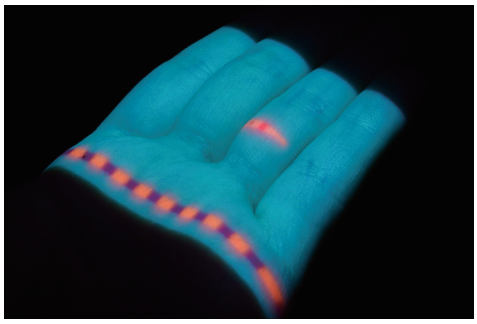
左から：星野源「不思議」MV、BUMP OF CHICKEN「窓の中から」MV、米津玄師「M八七」MV

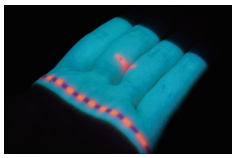


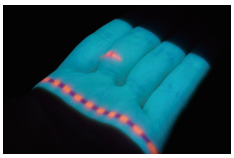
高橋海松「walk around」
人が歩き回ったりよじ登ったりする映像を投影することで、手を隆起した地形と見立てる試み。

課題　**身体に何らかの光（映像や画像）を投影することで、新しい皮膚の質感・感覚・意味を作り出す体験を設計しなさい。**

水谷美結「離脱」
ハサミで紙を切り離す映像を投影すると、腕が徐々に不可視になることで、身体の所有感が揺らぐ体験をつくる試み。







井上裕未「プールで泳ぐ」
静止した泳ぐ人を指の曲面に沿わせるように動かすと、水面と水中を行き来しながら泳ぐように見える。

■ 映像そのものを問い直し新たな価値を生み出す

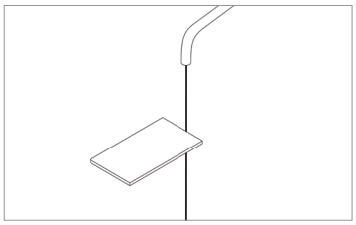
統合デザイン学科 3年「菅プロジェクト」
担当：菅俊一 先生

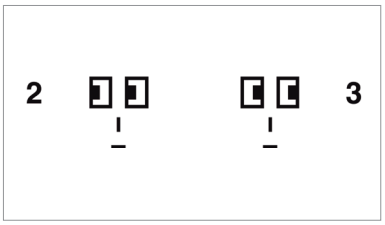
社会をよりよくするためにデザインには何ができるか?

皆さんが一般的に思い浮かべる「映像」は、スクリーンやディスプレイに映し出されるものだと思います。しかし、身体に映像を投影したらどうなるでしょうか？　既存のメディアの形状から解放されることで、身体拡張や体験設計にまで踏み込んだ動的な情報をデザインできるのではないか――。私が担当する授業では、まず初めにそうした問いを学生たちに投げかけ、映像をきっかけに人間の知覚や新しいデザインを考えてもらっています。なかには、手の平の上に、動くコマの映像を投影する学生もいました。面白いのは、コマの動きに合わせて、投影された人が手の形を調整する反応を起こしたこと。映像そのものを問い直すことで生まれたこうした「気づき」が、新しいアイデアの源になるのです。

デザインやアートを学んだ人に社会が求めているのは、このように既存のものへ疑問を持ち、そこから新しい価値を生み出すことです。問題を発見し、解決し、社会を1ミリでもよりよい方向に進める根底の力がここで身につくはずです。学生の皆さんには、自分から新しいアイデアや価値を生み出していける人に育ってほしいと思っています。

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了後、ピープル株式会社にて乳幼児向け知育玩具の企画開発に携わる。人間の知覚能力に基づいた新しい表現の在り方を研究し、映像や展示、文章をはじめとした様々な分野で活動を行っている。2012年、「D&AD Awards イエローペンシル」を受賞。





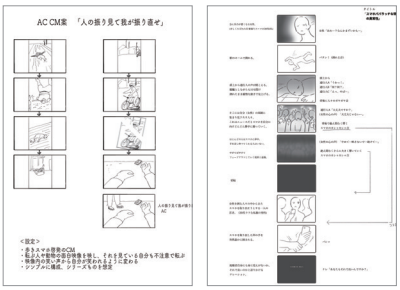
左：映像が突然暗転することで、そこまで見てきた変化から「映像のその後を想像する」体験をつくりだす「Imagine Yourself」（2019）、中2点：スマートフォンの映像を逆方向に動かすことで、文章が空間に定着しているように感じさせる「空間に定着する文章」（2020）、右：視線の持つ直進性という特性を使って、ふたつのオブジェクトを画面外で合成する「視線の設計」（2023）

課題 自分が社会に訴えたいことを
公共広告のCMコンテにまとめてください。

■ 答えのない問題を考えるための思考力や視点を身につける

グラフィックデザイン学科 3年「CMディレクションⅠ」
担当：真田敦 先生

学生によるオリジナルの公共広告の演出コンテ。歩きスマホに対する注意喚起や、パパラッチ化する社会への警鐘など、各自の問題意識をコンテにまとめている。



ものの見方を広げて人に届く表現に落とし込む

私が担当する「CMディレクション」という授業は、「映像を考えること」について考える時間です。カメラマンではなくディレクターなので、教えられるのも撮影技術ではなく演出の設計。撮影台本である演出コンテの作成を課題にし、学生たちの考える力を後押しするような授業を心がけています。

最近では、公共広告の演出コンテを課題にしました。商業広告とは異なり、社会啓発を理念にした公共性の高い広告。学生たちの世の中への不満、必要な社会変革を表現するようなCMの演出コンテを描いてもらいました。学生が考えたアイデアをベースに、要素の順番の並び替え、上から目線になっていないかなどアドバイスを送ります。限られた時間でどうすれば他人に興味を持ってもらえるかを考えられる、視点の多様性を身につけてもらいたいと思っています。

多摩美術大学デザイン学部立体デザイン学科インテリアデザイン専攻を卒業後、TYOを経て、2004年よりフリーランスの映像ディレクターに。主なCMの仕事にJR東日本「行くぜ、東北。」、サントリー「南アルプスの天然水」など。映画『ホノカアボーイ』、『いぬのえいが』では監督を務めた。

左から：映画『ホノカアボーイ』(2009)、映画『いぬのえいが』(2005)、日清紡CM、KINCHO「キンチョール」CM。日清紡のCMは、就活を控えた学生に対して「日清紡」という企業の認知を高めることに専念してつくられたCMだという。

各学科で展開される“映像で魅せる力”を学ぶ授業

油画専攻

表現手段としての映像の可能性を試す
「実技Ⅱ 技法講座（映像）」
担当：鈴木余位先生

グラフィックデザイン学科

個々の世界観を活かしたアニメーションを制作
「アニメーションA-Ⅰ」担当：野村辰寿先生

メディア芸術コース

撮影と編集に重点を置き映像表現スキルを学ぶ
「映像基礎［A／Bクラス］」担当：情報教員

幅広いアニメーションから映像表現の多様性を学ぶ
「メディア芸術基礎Ⅰ」担当：水江未来先生

※2023年度に行われる代表的な授業をピックアップしています。

映像・音響制作の知識と技術を実践的に身につける
「映像音響［C／Dクラス］」担当：情報教員

情報デザインコース

プログラミングを用いた創造的な表現を目指す
「情報デザイン演習Ⅱ プログラミング演習」
担当：情報教員

芸術学科

映像制作を通じて「映像とは何か」を考える
「映像表現」担当：七里圭先生

ハリウッド黄金期の歴史を作品や作家をもとに考察
「映像理論Ⅰ」担当：金子遊先生

映像人類学などを通じて、作品を深く掘り下げていく
「映画の現在」担当：金子遊先生

統合デザイン学科

映像表現に必要な想像力や構成力を磨く
「中村プロジェクト」担当：中村勇吾先生

実制作を通じてアイデアを形にする演出や技術を学ぶ
「映像表現」
担当：野村律子先生

演劇舞踊デザイン学科

技術や技法に着目し多様な映像表現の在り方を検証
「映画映像史Ⅰ」担当：西村智弘先生

脚本・企画の世界観を情景として映像表現する
「映像美術ゼミ」担当：山下恒彦先生

企画コンテンツを美術製作し映像作品上映会で発表
「映像制作実習」担当：山下恒彦先生

映像表現を追求し、さまざまな映像分野で活躍する卒業生たち

映像表現の世界では、学科を超えて多様なバックグラウンドを持つ多摩美卒業生が、刺激的な映像作品を生み出し続けています。

ヨルシカ「月に吠える」MV

加藤隆

（04年グラフィックデザイン卒）

アニメーション作家。絵画、ドローイングの技法を活かした短編アニメーション、MV、ライブ映像、TV番組アニメーションなどを制作。米津玄師「パプリカ」MV、ヨルシカ「月に吠える」MV、NHK名曲アルバム ヴィヴァルディ四季より「冬」アニメーションなどを手がけている。

映画『サマーフィルムにのって』（2021）

松本壮史

（11年情報芸術卒）

映像監督として、映画、CM、ドラマ、MVなどを手がける。『サマーフィルムにのって』（2021）で長編映画デビュー。主な作品に映画『青葉家のテーブル』（2021）、ドラマ『ながたんと青と』、藤子・F・不二雄SF短編ドラマ『親子とりかえばや』、『お耳に合いましたら。』など。第13回TAMA映画賞最優秀新進監督賞、第31回日本映画プロフェッショナル大賞新人監督賞を受賞。

映画『零落』（2023）

竹中直人

（80年グラフィックデザイン卒）

俳優としてドラマや舞台、映画など多数の作品に出演し、日本アカデミー賞最優秀助演男優賞など多数の受賞歴を持つ。映画監督としても活動し、初監督作『無能の人』（1991）は、ヴェネツィア国際映画祭で国際批評家連盟賞を受賞。その他の監督作に『東京日和』（1997）、『零落』（2023）などがある。

大谷健太郎

（89年芸術卒）

映画『推しが武道館いってくれたら死ぬ』（2023）

映画監督。多摩美術大学在学中、『私と他人になった彼は』（1991）でぴあフィルムフェスティバル3部門を受賞。『avec mon mari アベックモンマリ』（1999）で劇場映画デビュー。近作に映画『推しが武道館いってくれたら死ぬ』（2023）、『美作物語 ～風を奏でる君へ～』（2023）などがある。

プロと同じスペックの映像機材もレンタル可能 学科を問わず利用できる「映像センター」

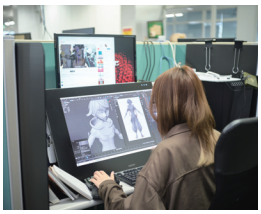
メディアセンター 映像センター 吉羽尚人

扱ったことのない機材やソフトも使い方からサポート

メディアセンター3階にある「映像センター」は、多摩美の学生なら誰でも利用できる共同施設です。予約不要で利用時間は10～19時。パソコンは約30台のMac Proがあり、映像制作会社で使われるような高水準の動画編集ソフトを搭載しています。大型液晶ペンタブレットのWacom Cintiq Proも利用可能です。ソニーのシネマティックカメラや一眼レフカメラのDSC-RX10、4Kハンディカメラ、用途に合わせた三脚などの撮影機材をレンタルしており、1階のビデオ撮影スタジオではグリーンバックの撮影をすることもできます。最近では、VRゴーグルの貸し出しも始めました。これだけの最新機器を取り揃え、学科を問わずに広い間口で開放しているのは、ほかの美術大学にない多摩美の特長だと思います。

用途やレベルは、学生一人ひとりによってさまざまです。サークルなどで短編映画を撮るために利用するケースもあれば、個人でコンペに出品する作品を撮影する学生、自身のポートフォリオを制作する学生もいます。私的な旅行の記録、初心者による興味本位の実験でも機材レンタルは大歓迎です。

映像センターはオープンなスペースなので、自由な雰囲気のなか、常駐スタッフや周りの学生にアドバイスを求めることができます。ソフトの操作方法に限らず、パソコンの使い方や出力の方法のような初歩的な質問も気軽にできる空間です。学生のみなさんには、何かが閃いたり、映像に興味が生まれたりしたときに、遊びに来る感覚で足を運んでみてほしいと思っています。



左：映像センターの様子、中：ビデオ撮影スタジオ、右：レンタルしている映像機材

サカナクション新宝島」MV

田中裕介

（01年グラフィックデザイン卒）

映像ディレクター。1978年生れ、CAVIAR所属。秀逸なデザインセンスと映像制作のスキルに遊び心を加味した独創性を武器に、多くの話題作を手掛け、CMやMusicVideoの映像演出を基軸に、グラフィックデザイン、アートディレクション、舞台演出など、その活動の幅は多岐にわたる。

田所貴司

（92年油画卒）

演出家・映像作家。日本最初のモーショングラフィッカー。CM、MV、ドラマなどのほか、VFXやモーショングラフィックを自ら手がけるクリエイターでもあり、「Creative + Engineering + Art」がモットー。手がけた作品は1000本を超え、TVドラマではVFX監督を務める。世界放送対応『NHK World』ブランディング映像がGood Design賞を受賞。

中島美嘉「Delusion」MV

きゃりーぱみゅぱみゅ「PONPONPON」MV

田向潤

（05年グラフィックデザイン卒）

映像ディレクター。1980年生まれ。多摩美術大学を卒業後、デザイナー経験を経て、CAVIARへ加入。その後2011年よりフリーランス。2018年よりCONNECTIONへ参加。主な仕事に、きゃりーぱみゅぱみゅ、くるり、SMAPのMV。モンスターストライク、ヤフオク！、Newニンテンドー3DS、日清カップヌードルのCMなどがある。

映画『はるねこ』（2016）

映画『つくもさん』（2022）

鹿野洋平

（15年メディア芸術卒）

映像作家。東映株式会社に芸術職として入社し、映画『孤狼の血』（2018）はじめ、数多くの映画やドラマに演出部として参加。2020年4月より独立し、フリーランスとして活動中。2023年に自身の企画である時代劇『うつつの光、うつる夜』のパイロット映像を東映京都撮影所にて監督、長編映画化を目指す。

甫木元空

（映像演劇卒）

青山真治・仙頭武則共同プロデュース、監督・脚本・音楽を務めた『はるねこ』（2016）で長編映画デビュー。第46回ロッテルダム国際映画祭コンペティション部門出品のほか複数の映画祭に招待された。2022年には、長編第2作『はだかのゆめ』を監督。バンド「Bialystocks」として音楽活動も展開している。

授業だけにとどまらず、学内には映像制作に取り組む団体やサークルも

「特殊撮影技術研究会」から発展した映像制作集団

スタジオ無著 STUDIO MUJAKU

『MIDNIGHT THE ERA』予告編

学内のサークル「特殊撮影技術研究会」から発展し、映像制作を行う自主制作映画団体「スタジオ無著」。現在は特撮技術とアニメーションを融合させたSF怪獣映画『MIDNIGHT THE ERA』を制作しており、特撮シーンの撮影では映像センターの撮影スタジオが活用されています。映像の撮影や編集はもちろん、アニメーションやジオラマセット、ミニチュア、怪獣の着ぐるみの立体造形に至るまで、すべて自ら制作。こうした制作力を背景に「劇映画」として理想の画面を追求しているのは、高いスキルとデザインセンスを持ち合わせた多摩美生の団体ならではです。

竹中直人など多くの映像作家を輩出

映像演出研究会

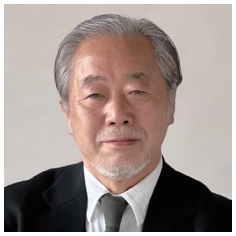
映像演出研究会は、1974年の発足以来、竹中直人さん、大谷健太郎さんなど、多くの映像作家を輩出してきた映像制作サークルです。実写、CG、アニメなど、部員はそれぞれ得意な分野で映像制作に取り組み、各自で技術を伸ばしたり、部員同士が共同で作品を制作したりしています。また、OBとのつながりが深く、アドバイスやプロの世界の情報などに触れることができるのも特徴のひとつです。

内藤廣新学長

インタビュー

混迷の時代の「不安」を アートやデザインを創り出す エネルギーに代えてほしい

2023年度から、多摩美術大学の第11代学長に就任した内藤廣学長。建築の分野で功績を残し、教育にも長く携わってきた新学長に、これからの時代にアートやデザインに求められる役割や多摩美の使命、学生たちへの期待などについて、お話をうかがいました。



多摩美術大学

内藤 廣（ないとう ひろし） 学長 NAITO Hiroshi

1976年、早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程修了（工学修士）。フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所（スペイン）、菊竹清訓建築設計事務所勤務を経て、1981年に内藤廣建築設計事務所設立。2001年、東京大学大学院工学系研究科社会基盤工学助教授に就任。翌年、同研究科社会基盤学教授。2010〜11年に東京大学副学長を務め、東京大学名誉教授に。2022年より公益社団法人日本デザイン振興会会長。2023年4月に多摩美術大学学長就任。

アート・デザインに対する意識を再構築するのが多摩美の使命

――今年度から多摩美術大学の第11代学長に就任されました。日本の現状を踏まえ、これからの時代のアートやデザインの役割をどのようにお考えでしょうか。

まず前提として、今の日本人のアートやデザインに対する意識は低いと思っています。戦後の高度経済成長の中で、デザインは「売れればいい」「売れるのが正義」という価値観に突っ走ってしまった。一方、アートのほうはバブル期には投機対象になってしまい、美意識のようなものはどこかへ追いやられてしまったところがあります。

本来、アートやデザインは心の渇きがある人を満たすためにあります。しかし、本来訴えかけるべき相手にアートは届いていない。そこに強い問題意識を持っています。

海外に目を向けるとヨーロッパでは、ドイツもイタリアも戦後に独自のデザインを確立しています。アジアでも中国は国家プロジェクトとして、デザインに力を入れているし、韓国も1997年の経済危機をきっかけにイノベーションよりもデザインだ。中身は外国から買って、アッセンブリ（組み立て）をすればいい。大切なのはヒューマン・インタフェース、つまりデザインだ……という方向に国が主導して舵を切ったのです。

日本はというと明治時代に東京藝術大学の前身である東京美術学校の設立に尽力した岡倉天心などが日本のアートを世界に発信しましたが、第二次大戦後は、とにかく焼け野原から商業国家として立ち上がるしか選択肢がなかった。高度経済成長期の1957年に当時の通商産業省（現・経済産業省）がグッドデザイン賞を始めるわけですが、ここでも「売れるものがGOOD」という価値観なわけです。そのまま大多数の日本人はアートやデザインを楽しむ意識を欠いたまま、現在に至っているというのが私の見方です。

技術発展や少子高齢化が進むこれからの時代において、日本人にとってのアート・デザインの意識を再構築しないといけない。ただ、企業や社会はすぐには変われません。それならば、大学から何かを変えていくしかありません。この局面において多くの学生が通う多摩美の役割は大きいと私は思います。

技術的なイノベーションも大切です。東大、東工大のような研究大学の学生にもぜひ頑張ってもらいたい。ただ、技術をつくり出せば、エンドユーザーに届くとは限りません。やはりヒューマン・インタフェースが必要になります。それを誰が考えるのか？　それは、多摩美のようなアート・デザイン領域の学生たちです。最近は情報革命によって、メタバースのようなバーチャル空間も広がっています。では、3D空間の奥の世界をどう描くのか？それは、エンジニアリングではなく、アート・デザインの領域だといえます。絵心やデザインの感性を持つ人が新しい世界をつくればいいのです。

もちろんバーチャルの世界に没頭しすぎれば、心が不安定になる人も出てきます。心の問題をどう支えるか。そこは、従来のファインアートが引き受けるべき領域でしょう。外に広がる世界と心の奥に向かう世界。両方があって人間です。この両面をアートやデザイ

内藤廣学長の仕事　左上：三重県鳥羽市「海の博物館」(1992)、右上：高知県高知市「牧野富太郎記念館」(1999)、左下：島根県益田市「島根県芸術文化センター」(2005)、右下：東京都渋谷区「東京メトロ銀座線渋谷駅」(2020)

ンの力で支えていける人材をここで育成したいというのが私の願いです。

――現代の日本人に足りないのは、具体的にどのようなものとお考えでしょうか？

固有の文化やアイデンティティのようなものだと考えます。今の日本人は丸裸になったとき、何を語れるのか？　お金の話じゃ悲しいですよね。「年収はいくらです」なんて言ってみてもGDPは世界3位から下がっていくばかりです。

本来、日本には文化コンテンツが豊富にあります。実際、京都は外国人に大人気だし、和食はユネスコ無形文化遺産に登録されています。しかし、現代の日本人はあまりそれを意識して来なかった。やはり、国家的な危機などが起こると人々は自らのアイデンティティを見つめ直すのかもしれません。

例えば、強国スペインとドイツに挟まれたフランスは、侵略に対する危機感の中で、国民のアイデンティティとして美しい言葉や料理を守ってきました。1917年のロシア革命後、独立したフィンランドもフィン人の文化とは何かと真剣に考えたと思うんです。だから、アルヴァ・アアルトの建築やイッタラの食器には、民族のアイデンティティがベースにあるのがわかります。

今、ウクライナの人々は大変な状況にありますが、まさに「ここは私たちの土地だ」という強い意志で団結し、隣国ロシアと向き合っています。世界を見渡せば、私たちの住む東アジアの情勢も決して安定してはいません。この混迷の時代だからこそ、われわれの文化やアイデンティティを見つめ直し、アート・デザインに対する日本人の意識を再構築していくべきだと考えます。

多摩美の学生たちに世の中を元気にしてほしい

――内藤先生は、建築家として世界を舞台に活躍しながら、東京大学副学長なども務められました。建築家、教育者として、今の多摩美術大学をどうご覧になっていますか？

今は以前と比べて、学びの多様性を感じます。ひと昔前は、油彩を学んだら画家か教員になるしかないというのが一般的なイメージでした。それが今では、油画専攻を出て、VRのプロになる人もいる。アート・デザインを志す人にとって、本当に自由な世界が広がっていると思います。

私は多摩美の学生に世の中を元気にしてほしい。ポジティブなエネルギーをアートやデザインで表現してほしいと思います。私が学長になったからには、キャンパスをとにかく明るくしたい。多摩美の学生は明るいね！と言われるような雰囲気をつくりたいですね。

私の専門である建築の考え方でいうと、ここはハウスではなくてホームであるべきなんです。「ホームタウン」はあっても「ハウスタウン」というのはないですよね。多摩美は学生のホーム、つまり心の拠りどころでありたいと思っています。

――多摩美術大学の学生たちにメッセージをお願いします。

この場所で人と出会ってほしいと思います。気の合う仲間はもちろん、「この人は！」と思える師を見つけられたら、これほど幸せなことはないでしょう。私もできるだけ学生たちと話す機会を持ちたいと思っています。

教育者としては、自分を超える人間を何人つくれるか――。そこが問われると思っています。自分の80%縮小のコピー人間をつくっても仕方がない。世の中を変えてしまうような自分以上の人間を在任中にどれだけ育てられるのか、自分でも楽しみです。

気候変動、ウクライナ情勢、国内の人口減少など、学生の皆さんは大きな希望とともに大きな不安も抱えているでしょう。ただ、不安は大きなエネルギーにもなります。いつの時代も優れたアートやデザインは、不安な世の中から生まれています。今こそ自分を見つめ直し、仲間と語らい、不安を大きなエネルギーに代えて、新しい何かを生み出してほしいと思っています。

第7回

企業の人事担当者・卒業生に聞く

多摩美への期待と実績

メーカー

サンリオ

「ハローキティ」「ポムポムプリン」「ぐでたま」などでおなじみの、日本を代表するキャラクター企業。ライセンスビジネスで確固たる地位を築くが、近年は「第二の創業」を掲げ、Web3やメタバースを取り入れたグローバルエンターテイメント企業へと躍進している。

「サンリオ展」のキービジュアルや「いちご新聞」の編集など卒業生が最前線で牽引

人事部
新卒採用担当
シニアマネージャー
石井和哉さん

2020年に初の社長交代をして以来、当社は「第二の創業」として大きな変革期にあります。VRChat上に「バーチャルピューロランド」を開園するなど早くからVRコンテンツを手がけたほか、社内では各デザイン部の統合により新部門も設立しています。会社全体で新しいチャレンジを進めるなか、クリエイター職に求められるものはいっそう大きくなっていくでしょう。

多摩美からは数年に一度の頻度で入社していますが、企業理念の「みんななかよく」という言葉のとおり、入社したら学歴を問わないフラットな社風です。スキルもさることながら、同僚や取引先と円滑に仕事を進めるためのコミュニケーション力も大切だと考えています。

新卒採用では、営業や事務などの一般選考とデザイナーやプランナーなどのクリエイター選考のふたつのコースがあり、後者ではクリエイティブ力を重視しています。オリジナリティがあるか、チャレンジ精神に溢れ、他者と違った強みを備えているかなど、作品と人柄の両面を見ています。各種イベント時のキービジュアルの社内コンペで出てくるデザインを見ても、同じテーマを描いていながらアウトプットされるデザインの幅がとにかく広く、さまざまな表現力を持つクリエイターが活躍しています。

グローバルデジタルマーケティング本部
コミュニケーションデザイン部 兼 キャラクタープロデュース室
デザイナー
伊藤亜耶さん
（16年情報デザインコース卒）

今年からふたつの部署に在籍し、メインの業務はコミュニケーションデザイン部で担当しているサンリオのブランド訴求です。サンリオショップに並ぶ商品のデザインに加えて、SNSなど商品以外のコンテンツにも携わり、キャラクターの育成に取り組んでいます。もうひとつの所属であるキャラクタープロデュース室では、「ハローキティ」のアートディレクターとしてブランディングなどを担当しています。「ハローキティ」は2024年に50周年のアニバーサリーイヤーを迎えるので、関連する国内外の施策の準備に力を入れている最中です。

在学中には大手IT企業でインターンをし、内定をいただきましたが、短いサイクルで変化していく業界に寂しさを感じていました。その点、サンリオのキャラクターは何十年も色褪せることなく、「かわいい」で時代を超えていきます。そうした永続性に惹かれて入社したので、創業60周年を記念した「サンリオ展」のキービジュアルのデザインが社内コンペで採用されたことは大きな喜びでした。歴代のキャラクターを描き込む必要があるなか、代表的なキャラクターである「ハローキティ」を際立たせたデザインにし、広告展開など施策のアイデアまで考え抜いて提案できたことが評価されたのではないかと思っています。

さらに最近は、お客さまが好きなキャラクターやデザインを選んで商品をカスタマイズできる「MY SANRIO」という公式オンラインショップの新サービスの立ち上げに携わりました。社内横断プロジェクトだったため、私も普段の業務の範囲を超えてサービス内容からUI・UXデザイン、商品デザインまで担当することになりましたが、ここでも情報デザインで培った幅広いモノづくりの経験が要所要所で活きたように思います。

グローバルデジタルマーケティング本部
いちご新聞編集局
デザイナー
深田舞衣子さん
（16年グラフィックデザイン卒）

入社以来、サンリオの月刊情報紙である「いちご新聞」のデザイナーを務めています。1975年から続いている歴史ある媒体で、全40ページのフルカラー。私は紙面やふろくのデザインのほか、入社した2016年の9月号から表紙を担当しています。心がけているのは「みんななかよく」という企業理念をひと目で伝えられるようにすること。特定のキャラクターの誕生月にはお友だちを一緒に登場させたり、たくさんのキャラクターが仲良く過ごす姿を描いたり、デザインに優しいメッセージを込めることを大切にしています。キャラクターの誕生月やクリスマスなどのイベントが固定されているなか、どうすれば毎月新しい「かわいい」をお客さまに届けられるかが難しい部分かもしれません。メンバーと展示やイベントに出かけてリサーチし、雑誌や映画などからも日々インプットして、懐かしいものを大事にしつつ、最新のものも取り入れた紙面作りを意識しています。描き起こしたイラストがグッズやカフェに展開されることもあるので、そのクリエイティブ監修も仕事のひとつです。

進路のきっかけは、「たれぱんだ」の生みの親である末政ひかる先生のキャラクターデザインの授業です。先生自身や先輩方の作品など、いつも資料をたくさん持ってきてくださいました。そこで刺激を得て、オリジナルキャラクターを持っている企業を志望するようになったのです。卒業制作のアニメーション作品では、野村辰寿教授から世界観やキャラクターの造形を掘り下げていく思考について教わりました。「人に伝わるようにアウトプットする」という考え方は今の仕事にも通底しています。多摩美での学びは、きっと学生のみなさんの人生をも後押しするはずです。

多摩美出身者は、ビジネスの最前線からどのような評価を受けているのでしょうか。また、その卒業生たちが学んだ多摩美での4年間は、ビジネスの現場でどう生かされているのでしょうか。さまざまな業界で活躍する企業人たちに尋ねました。

本記事は連載企画です。さらに詳しい内容や他企業情報はWebでご覧になれます。

制作会社

資生堂クリエイティブ

資生堂のクリエイティブ部門から2022年1月に独立。「美の力、クリエイティビティの力を信じ、世界に感動をもたらす」という企業理念のもと、プロダクトから広告宣伝、スペース、コミュニケーションデザインまで一気通貫で「美の体験」を創出している。

デザイナーとして個性を持ちながらクライアントの課題に柔軟に対応する

ビジネスマネジメント部
広報・採用担当
中山怜さん

資生堂クリエイティブのデザイナーは、各々が培ってきた個性や強みを芯に持ちながら、会社の色に染まりきらない形で新しいデザインを提案できる人が多いと実感しています。そうした意味では多摩美の卒業生も、確かな専門性に加えて複数の領域を越境しながら、多様な分野で活躍しています。これは複数領域にまたがる学習の成果だと思います。

クライアントが抱える課題に対して、解決のために戦略を練り、最適なアウトプットを導き出す。そうした過程において、ただ求められたことに対処するだけでなく、自発的に行動できる人材はとても貴重です。多摩美生からはインターンの問い合わせをいただくこともあり、その積極性には私たちも期待しています。

アートディレクター／デザイナー
井上千聖さん
（16年プロダクトデザイン卒）

資生堂パーラーのお菓子や「INTEGRATE」「Snow Beauty」「ANESSA」といった化粧品のプロダクトデザインを担当しています。容器や外箱の造形に加えて、私はグラフィックやイラストをつくるのが好きなので、パッケージのイラストまで描いたり、キャラクターデザインなどを担当したりすることもあります。自身の得意分野に応じて幅広い分野にアサインされるので、強みが活かされていると感じます。

在学中から、私はグラフィックやイラストを使って課題に挑戦することが多くありました。プロダクトとグラフィックは領域としては少し離れていますが、自分の興味に応じて挑戦できたのがよかったと思います。ただ、自由だからこそリサーチやテーマ設定には苦心する場面も多かったです。毎回、課題発表でプレゼンをしますが、そこでもプレゼンシートのデザイン性や相手への伝え方が鍛えられました。教員や学生からの講評に対峙した経験が、クライアントの要望に柔軟に応える現在の仕事に活かされています。むしろ、多摩美の課題のほうがハードだったと思うこともあります。課題に一生懸命取り組んでいれば、社会に出ても十分に活躍できると感じました。

メーカー

積水ハウス

“「わが家」を世界一幸せな場所にする”をグローバルビジョンに掲げ、大阪に本社を構える住宅メーカー。近年は海外における戸建住宅や集合住宅、ホテルなどの建設・販売、さらには都市開発といった国際ビジネスにも取り組み、事業の多角化を推進している。

多摩美で養われた「答えのない問い」を考える力がツール開発に活かされる

人財開発部
人財採用室 新卒採用グループ
中山隼さん

積水ハウスというと戸建住宅設計のイメージが根強いと思います。しかし、近年は消費者やクライアント企業のニーズの多様化が進んでおり、美しさや暮らしやすさへの関心が高まるにつれて、建築以外の視点も重要視するようになりました。デザインの専門性を高めた美大生は、住宅業界においても活躍の場が広がり続けています。

さらに競合他社がたくさんあるなかでお客さまに選んでいただくためには、目の前の一人ひとりへの提案の質も高めていかなければなりません。そのためには、興味関心の幅広さや観察眼が重要になるかと思います。相手をよく観察し、細やかな気づきから言外のニーズをつかめるような、感受性の高い人が住宅業界でも求められています。

技術人財開発部
外構設計強化グループ
高源佳希さん
（21年環境デザイン卒、2級建築士）

外構設計強化グループという、社内の設計力やデザイン力を高めるための部署で働いています。主に携わっているのが、門扉やアプローチ、庭などのエクステリアの設計力強化です。当社には住宅を総合的に一貫して設計する方針があり、そのための社内研修の運営、iPadツールの開発、物件の分析などに取り組んでいます。特に深く携わったのが、支店の営業・設計担当者が利用するためのiPadツールの開発です。開発ありきのプロジェクトではなく、社内で何が求められているのかヒアリングするところからスタートしました。やがて把握したのが、社員がエクステリアの魅力をお客さまに伝えきれていないという課題です。そこで、お客さまの前で説明しやすいスライドのようなiPadツールを開発し、プレ運用でも好評だったので、これから全国展開されることになりました。

自分たちで課題を見つけて、解決するための施策を考えるのは、環境デザインの授業でも経験していました。「段ボールで人体を支えなさい」や「竹を使って『涼』を感じる空間をつくりなさい」といった授業のように、「答えのない問い」を通してデザインを学べたあの時間は、今の社会人生活にも間違いなく役立っています。

アヌシー国際アニメーション映画祭に本学卒業生の2作品がノミネート

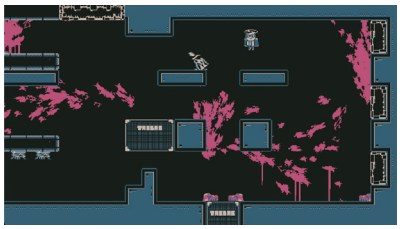
「アヌシー国際アニメーション映画祭2023」の卒業制作部門に、23年大学院グラフィックデザイン修了・キョ・ガンさんの「Sewing Love」、23年グラフィックデザイン卒業・木原正天さんの「トモヤ！」が選出されました。同映画祭は1960年にカンヌ国際映画祭から独立する形ではじまったもので、アニメーションに特化した映画祭としては世界最古、最大規模を誇ります。長編、短編、卒業制作、テレビ、受託の各部門があるコンペティションはいずれも狭き門です。例年フランス南東部の都市・アヌシーで行われ、今年は6月11日から17日まで開催されました。また、キョさんの作品は、同じく世界四大アニメーション映画祭に数えられる、クロアチアの「ザグレブ国際アニメーション映画祭」でも特別表彰を受けており、権威ある国際映画祭での快挙が続いています。

木原正天「トモヤ！」

キョ・ガン「Sewing Love」

学生向けゲームコンテストで赤松秀晃さんが最優秀賞

株式会社コナミデジタルエンタテインメント主催の「Indie Games Contest 学生選手権」でメディア芸術2年・赤松秀晃さんが最優秀賞を受賞しました。受賞作「Death the Guitar」は持ち主を殺されたエレキギターが電気と音を操って戦う、2D横スクロールアクションゲームです。シンプルな操作で直感的に遊びやすく、「プロのクリエイターによるインディーゲームの中にまざっていても遜色ない」と評価されました。


トロヤマイバッテリーズフライド（赤松秀晃）「Death the Guitar」

学生対象立体コンペのポスターで最優秀賞を受賞

第23回学生限定立体アートコンペ「ART MEETS ARCHITECTURE COMPETITION（AAC）2023」の募集告知ポスターのコンペティションで、グラフィックデザイン3年・松井寛太さんが最優秀賞を受賞しました。これはマンションに設置する立体作品の募集告知自体を募るもので、受賞作品は審査員の一人で10年同卒業のデザイナー、上西祐理さんとのブラッシュアップを経て、実際にポスターとして掲出されました。

松井寛太「試行錯誤」

金井教授が参加した舞台作品が菊田一夫演劇大賞を受賞

演劇舞踊デザイン・金井勇一郎教授がプロダクションマネージャーと舞台装置制作を担当した舞台「ハリー・ポッターと呪いの子」が、第48回菊田一夫演劇賞で演劇大賞を受賞しました。一般社団法人映画演劇文化協会が主催する本賞は、大衆演劇の舞台で優れた業績を示した者を表彰するものです。受賞作は昨年7月の開幕から大好評を博し、総観客数が30万人を突破。現在もTBS赤坂ACTシアターでロングラン公演が続いています。

TBS開局70周年記念 舞台「ハリー・ポッターと呪いの子」

塩田千春特任教授が大阪文化賞と京都府文化賞受賞

大阪文化賞
贈呈式の様子

大学院エクスペリメンタル・ワークショップ（EWS）の塩田千春特任教授が、令和4年度大阪文化賞および第41回京都府文化賞功労賞を受賞しました。塩田教授の国際的に高く評価されている精力的な活動が、ゆかりのある2つの自治体の文化振興にそれぞれ貢献したとして表彰されました。2月1日に京都府文化賞の授賞式が、3月26日には大阪文化賞贈呈式が行われました。

デザイン賞の受賞で日仏の「匠の技」の対話が実現

テキスタイルデザイン・遠藤絵美非常勤講師が、在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセとモビリエ・ナショナル（フランス国有動産管理局）主催の「第1回デザイン賞」を受賞しました。本賞を受け、遠藤講師はテキスタイルとデザインを組み合わせたプロジェクト「チェーンリンク・フェルト・ホームアクセサリー」のリサーチのため、パリのモビリエ・ナショナルの工房にサポートを得て1ヵ月間滞在します。

Vinyl Chloride Basket Bag, 2019 Emi Endo (EETY)

大東建託との産学共同研究で次世代賃貸住宅が商品化

大東建託株式会社との産学共同研究で学生が考案した「次世代の賃貸住宅のプロトタイプ」が、同社の創業50周年記念商品として5月1日から販売されています。商品化されたのは、各住戸の1階に大型窓のある広い玄関スペースを設けた、見せてつながる賃貸住宅「VISION MyTAG」です。SNS的価値観を反映し、地域・入居者間のリアルなコミュニケーションの創出を図る学生のアイデアをもとにブラッシュアップされました。

「VISION MyTAG」外観イメージ

林響太朗非常勤講師が大学ブランディング動画を制作

情報デザイン・林響太朗非常勤講師が手がけた大学ブランディング動画を本学YouTubeチャンネルで配信しています。数々のミュージックビデオを手がける映像ディレクターで、卒業生でもある林講師が、本学スローガンである「自由と意力」をもとに学内で起きている美しい景色を厳選して紡ぎ出した映像です。

動画はこちらから視聴できます

ウクライナから3人目の支援学生が来日

本学は戦禍のウクライナで厳しい状況下にある芸術を志す学生たちを支援するべく、研究・制作環境を提供するプログラムを行っています。本学が受け入れる3人目の支援学生としてピシャンスカ・アナスタシアさんが3月17日に来日、4月からメディア芸術コースの研究生として所属し、映像やアニメーション、サウンドを用いたメディアアートの創作に取り組む予定です。

写真左からメディア芸術・久保田晃弘教授、ピシャンスカ・アナスタシアさん、国際交流センター職員

子育てに新たな価値を提案するPBL科目を開講

今年度の新たなPBL科目のテーマのひとつ、「0〜3歳児の衣食住にちなむデザイン提案」に、ベビー用品の企画開発を手がける有限会社フィセルと約50名の学生が取り組みます。本学のPBL（Project Based Learning）科目は、所属学科や学年を越えて履修できるプロジェクト型授業です。1年を通しリサーチや討議を重ねて、次世代の子育てをバージョンアップできるアイデアの創出を目指します。

プロジェクトの説明を行う榎本恭子取締役 統括部長

日本郵船との産学共同研究を開始

本学は日本郵船株式会社との産学共同研究契約を締結し、3月23日に八王子キャンパスにて産学共同研究調印式を行いました。本研究は本学TUBが複数の企業と取り組む廃棄物循環型経済モデル「すてるデザイン」プロジェクトの一環であり、同社人材育成組織「NYKデジタルアカデミー」の活動のひとつです。今年度は「船上での環境をRe-designする」をテーマに、次世代の循環型社会に適応する船員のユニフォームの研究開発を進めます。

握手をかわす鈴木英樹執行役員（写真左）と和田達也教務部長

「アートとデザインの人類学研究所」として再出発

芸術人類学研究所は、人文科学・自然科学を含めたサイエンスやデザイン分野との連携と協同をより広く進めてゆくという目標を掲げ、4月1日より「アートとデザインの人類学研究所」に名称変更しました。変更後初の公開イベントとして、5月13日、芸術学科「21世紀文化論」との共催で、「いけばな」を根幹に独自の表現を進める花道家・杉謙太郎さんによる花会「Blind Flower 盲目の花」をメディアホールにて行い、学内外から150名が参加しました。

「Blind Flower 盲目の花」開催の様子　撮影：土田祐介

大学院EWSで集中ワークショップ実施

アピチャッポン特任教授クラスのワークショップの様子

大学院エクスペリメンタル・ワークショップ（EWS）の2022年度集中ワークショップが行われ、アピチャッポン・ウィーラセタクン特任教授クラスは「Reasons for being」をテーマとして2月21日から3月6日に、「昨年行われた世界各地の芸術祭からひとつを選択して、そこに展示したい作品を制作する」ことに取り組んだ塩田千春特任教授クラスは3月18日から29日に実施されました。

オスロ国立芸大との研究成果をノルウェー大使館で発表

3月24日、プロダクトデザイン専攻、テキスタイルデザイン専攻とオスロ国立芸術大学デザイン学科との国際協同教育プロジェクト「Connecting Wool」の研究成果発表がノルウェー大使館で開催されました。コロナ禍を経た社会状況を踏まえ、ものづくりの意味を問い直し、研究対象のノルウェー北部に生息するワイルドシープの毛の新しい活用方法を探りました。両大学の学生混成による7つのグループが、「MAKE」をテーマに各々提案を形にしました。

研究成果発表の様子

循環型社会を豊かに楽しむ展示玉川髙島屋S・Cで開催

4月26日から5月9日、TUBの「すてるデザイン」プロジェクトの一環として、プロダクトデザイン専攻の3、4年生27名による「Re-MAKE」展を玉川髙島屋S・Cにて開催しました。これはサステナブルな暮らしを提案する髙島屋のイベント「TSUNAGU ACTION WEEKS」に出展したもので、学生たちは身の回りの使われなくなったものに3Dプリンターで制作したパーツを付け、別の用途の道具に変えることに取り組みました。

「Re-MAKE」展の様子

八木幾朗教授の退職展をアートテークで開催

5月1日から22日、アートテークギャラリーにて、3月に退職した日本画・八木幾朗元教授の退職記念展「戦争と人間」を開催しました。最奥の展示室には4点で横幅50メートルを超える大作が展示。エントランスや1・2階にわたって、「芸術家は強い信念を持って表現し、行動すべき」との考えに基づいて活動してきた八木教授の数々の作品が並びました。また、4月15日から6月25日には原爆の図丸木美術館でも共同開催されました。

「戦争と人間」会場風景

人事異動

定年退職

2023年3月31日付で12名の方が定年退職、3名の方が選択定年で退職されました。長い間お世話になりました。

宮いつき 教授 | 日本画専攻

上野毛校舎から八王子キャンパスと移り18年間、多摩美で過ごした日々はあっという間でした。在籍中、お世話になった方々に感謝いたします。
上野毛の造形表現学部時代の熱気を帯びた学生達や夜の光が灯った校舎が印象深く、瞼の奥に未だその光景を思い出します。
「芸術とは何か、美術とは何か」を学生達と探して来た旅のように思えます。これからの美術大学はたくさん課題があると思いますが、多摩美の自由な発想で、より発展する事を心より応援しております。ありがとうございました。

八木幾朗 教授 | 日本画専攻

この度、多摩美日本画を退職致しました八木幾朗です。退職展「戦争と人間」には思いがけなく、多くの他大学の教授を含め、ご来場頂きありがとうございました。私は芸術家はただ有名になったり、ましてやお金の為だけに活動するべきでは無いと考えています。それを若い人に教えられない芸術大学には存在意義はないと考えており、今回の表題に致しました。多摩美術大学が平和、そして弱者への思いやりのある生徒を創る大学になってほしいと心から願っております。

井上雅之 教授 | 工芸学科

多摩美には学生として、助手また非常勤と約40年間お世話になりました。特に専任の後は、大学での様々の刺激が自宅仕事場での作品制作へと繋がり、そこで得たものを教室へ持ち帰る日々でした。大学と自宅での仕事が車の両輪のようにお互いが分かち難い幸せな年月となりました。教え教えられる関係でありたいと考えていましたが、受け取ることの方がはるかに多かったと感謝しております。長い間ありがとうございました。＊選択定年退職

小林光男 教授 | 工芸学科

旧立体デザイン科を卒業後、同学科副手から非常勤講師。時期を経て野口裕史先生のお誘いで工芸学科に着任してから退職まで、長いようで短いような不思議な時の感覚を持っております。その中では、多くの方々との交流やご協力が支えとなりました。恩師は元より、教職員の方々や学生たち、先輩後輩、そして同期の方々等にあらためて感謝いたします。多摩美術大学皆様の一層のご発展ご活躍をお祈りいたします。ありがとうございました。 ＊選択定年退職

田淵諭 教授 | 環境デザイン学科

気がつけば定年、あっという間の40年でした。日々感性豊かな学生の指導で、私自身も創作に多くの刺激を受けました。
また、建築科から環境デザイン学科への改組、八王子キャンパス設計にスタートから30年間関わらせていただき、学科を超え教職員と密な打合せを持てたことは、楽しい思い出と大きな財産になりました。
コロナから解放され、キャンパス内の学生の活気が嬉しいこの春、多摩美と皆様のご発展をお祈りしております。

枡野俊明 教授 | 環境デザイン学科

四半世紀に渡り、多摩美術大学環境デザイン学科にてお世話になりました。私の多摩美での歴史は環境デザイン学科の歴史そのものです。思い起こせば、走馬灯のごとく色々な事柄が頭に浮かんできます。懐かしくもあり寂しい気持ちでありますが、これが新たなる出発と心得、明日からも一歩一歩前に向かって歩んで行きたいと思います。皆さま方25年間、本当に有難うございました。

永原康史 教授 | 情報デザイン学科

2006年4月に着任してすぐ、まだ工事中だった新図書館の仕事をし、開館までをまとめた書籍『つくる図書館をつくる』(鹿島出版会) を制作した。
2011年、東日本大震災のときには教務主任を務めており、対応に奔走した。
2020年からメディアセンター所長と紀要委員長を兼任し、パンデミック下での運営に腐心した。
思えば大変な17年間だったが、学生との楽しい時間に救われて任期を全うすることができた。すべての学生に感謝します。どうもありがとう。

成瀬一裕 教授 | 演劇舞踊デザイン学科

定年退職のコメントと云う事で「TAMABI NEWS」の誌面を割かせて頂きます。
私は新学科創設後の着任で8年間と云う短い在任期間でありました。しかし卒業生の巣立って行く姿を6度見る事ができ幸福であったと思っています。個の領域であるデザインの創作とブレインストーミングが要求される集団での創作活動との融合と云う難行を乗り越えていった素晴らしい卒業生達の活躍を祈り、学科と多摩美術大学の益々の発展を願うばかりです。

野田秀樹 教授 | 演劇舞踊デザイン学科

榎本和生 教授 | リベラルアーツセンター

31年間教職課程でお世話になりました。最も記憶に残っているのは、着任早々の若輩者の私に「規則委員会の委員長をやれ」と、そして最初に手がけたのが「学生相談室の創設」です。難産でした。その顛末を私の退職記念誌『私のライフキャリアデザインと学問ーライフキャリア発達学と応用行動分析学ー』に書かせていただきました。
多摩美術大学は永遠に不滅です。一層のご発展を祈念しております。

西岡文彦 教授 | リベラルアーツセンター

日本で唯一の美大夜間部であった上野毛キャンパスで教員生活の第一歩を踏み出せたことは、私のなによりの幸運であり誇りでもあります。時には、私より年長の学生さんも交え、さまざまな世代のさまざまな境遇の方達と美術を学ぶ場を共有できたことは、私にとって生涯の宝ともいうべき思い出となってくれています。長い間、本当にありがとうございました。

諸川春樹 教授 | リベラルアーツセンター

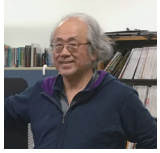
高校生の頃から憧れていた本学に、なんと教員として「入学」することになり大喜びしました。しかしそれも束の間、入学式に大遅刻をしてしまい「この大学とは縁が薄いかも」と落胆しました。あれから34年、先生方や職員の皆さんに支えられて無事に定年を迎えることができ、感謝の言葉しかありません。ことに学生の皆さんとの思い出は尽きることなく、本当に楽しかった教員生活でした。これからも本学が「憧れの大学」であり続けるよう祈念しております。

石井美奈子 総合職 主任 | 経理課

学生時代、一番苦手な教科が美術でした。
それが縁あって美術大学に就職することになりました。
好きなことに情熱を注ぎ日々制作に取り組んでいる学生さんや、助手、副手さん達との出会いは、当時私も同じくらいの年齢でしたし、とても刺激的なものでした。
これまで多摩美で出会った皆様、ほんとうにお世話になりました。皆様のご多幸、ご健勝をお祈り申し上げます。＊選択定年退職

駒形克明 専門職 | 附属メディアセンター

曽根章 専門職 | 附属メディアセンター



キャリアの前半は教務部（教務課から学務課）所属にて絵画東棟地下のタマビリアムにて機材貸し出し、映像編集などを担当してきました。当時大学組織の改組、授業履修の電算化も経験させていただき良い思い出となっています。キャリア後半はメディアセンター立ち上げから参加させていただき現在に至ります。振り返れば、八王子校舎に移転してから6年後に入学ということで学生時代を含めると44年間ほど多摩美とともに歩んできたことになり感慨深いものがあります。これからは多摩美術大学のさらなる発展をOBの1人として期待しています。

退職

● 学長
建畠哲 学長

● 美術学部
山本瞳（日本画助手）
町田帆実（油画助手）
楊いくみ（油画助手）
古川ゆめの（版画助手）
和賀碧（彫刻助手）
今城芙美乃（工芸助手）
石井慎一郎（グラフィックデザイン助手）
桑原仁太（グラフィックデザイン助手）
金井千夏（プロダクトデザイン助手）
増田麻由（プロダクトデザイン助手）
平野晶（テキスタイルデザイン助手）
安藤鋼介（環境デザイン助手）
佐川日南乃（環境デザイン助手）
浜田卓之（情報デザイン助手）
青島綾音（芸術学助手）
遠藤良亮（リベラルアーツセンター助手）
齊藤梨紗（プロダクトデザイン副手）
大川原紗岐（テキスタイルデザイン副手）
監物佳南枝（情報デザイン副手）
山本彩果（情報デザイン副手）
島貫悟（芸術学副手）

● 総務部人事課
塩田章彦 総合職 課長

● 広報部広報課
横井絵里子 常勤嘱託

● 附属メディアセンター写真センター
原田要介 常勤嘱託
（以上2023年3月31日付）

新規採用

● 美術学部
平塚聖子 教授（テキスタイルデザイン）
佐々木千穂 教授（統合デザイン）
近藤良平 教授（演劇舞踊デザイン）
森山直人 教授（演劇舞踊デザイン）
山岸竜治 教授（リベラルアーツセンター）
塩谷良太 准教授（工芸）
留守玲 准教授（工芸）
青木香代子 准教授（環境デザイン）
犬飼基史 准教授（環境デザイン）
陳芃宇 講師（日本画）
荒牧悠 講師（統合デザイン）
大平智己 講師（演劇舞踊デザイン）
野上絹代 講師（演劇舞踊デザイン）
佐藤真奈美（版画助手）
神谷紀彰（工芸助手）
叶田百恵（リベラルアーツセンター助手）
山口岳人（日本画副手）
白帆ひろみ（油画副手）
園田将久（油画副手）
工藤雄大（彫刻副手）
中山さとみ（グラフィックデザイン副手）
永岡夏碧（グラフィックデザイン副手）
梁敬雪（グラフィックデザイン副手）
川久保奏羽（プロダクトデザイン副手）
佐藤真優（プロダクトデザイン副手）
森田留奈（プロダクトデザイン副手）
チョウ・ブンイチ（テキスタイルデザイン副手）
ボム・ジェウォン（テキスタイルデザイン副手）
久志本瑠花（環境デザイン副手）
千葉聡太郎（環境デザイン副手）
太田宙（情報デザイン副手）
千葉氣弓（情報デザイン副手）
野坂優花（情報デザイン副手）
髙橋莉子（芸術学副手）
長岩実穂（演劇舞踊デザイン副手）
神薗峻也（リベラルアーツセンター副手）

● 大学院
伊東豊雄 教授
常盤豊 特任教授

● 国際交流センター
ムーニー・スザンヌ 准教授

● TCL
大貫冬斗 特任講師

● 広報部高大接続課
櫻井綾 総合職

● 社会連携部社会連携課
古川礼規 常勤嘱託

● 教務部研究支援課
有馬智子 総合職

● 学生部学生課
徳永琉一 総合職
今井知子 技能職

● 附属メディアセンター映像センター
アディリジャン・ヌリマイマイティ 専門職
髙田晴菜 常勤嘱託

● 附属メディアセンター工作センター
齋藤典子 専門職
田遠裕太 専門職
（以上2023年4月1日付）

● 広報部メディア戦略課
川島千恵 総合職 主任

● 総務部総務課
鈴木美保 総合職 主任

● 人事部人事課
湯川浩二 総合職

● 附属メディアセンター写真センター
山木優子 常勤嘱託
（以上2023年5月1日付）

● 附属アートアーカイヴセンター事務室
髙杉美里 常勤嘱託
（2023年6月1日付）

※6月1日付で事務組織改編あり
（所属部署名が入職時と異なる場合があります）

昇格

千々岩修 教授（日本画）
日野之彦 教授（油画）
大島徹也 教授（芸術学）
石川俊祐 特任教授（TCL）
千葉正也 准教授（油画）
木村剛士 准教授（彫刻）
中谷ミチコ 准教授（彫刻）
尾形達 准教授（プロダクトデザイン）
谷口暁彦 准教授（メディア芸術）
糸井幸之介 准教授（演劇舞踊デザイン）
柴幸男 准教授（演劇舞踊デザイン）
後藤正矢 准教授（リベラルアーツセンター）
中嶋英樹 准教授（リベラルアーツセンター）
（以上2023年4月1日付）

任命

学長
内藤廣

研究科長
松浦弘明

教務部長
和田達也

学生部長
古谷博子

国際交流センター長
久保田晃弘

キャリアセンター長
田中秀樹

学部長補佐
高梨美穂

学科長
佐々木成明（情報デザイン）

センター長
佐藤達郎（リベラルアーツセンター）

附属美術館長
建畠哲

附属アートアーカイヴセンター
千々岩修（所員）
加藤勝也（所員）
髙橋庸平（所員）
久保田晃弘（所員）
深津裕子（所員）

附置アートとデザインの人類学研究所
港千尋（所長）
佐藤直樹（所員）
金沢百枝（所員）
椹木野衣（所員）

名誉教授
建畠哲
宮いつき
井上雅之
小林光男
田淵諭
枡野俊明
野田秀樹
西岡文彦
諸川春樹

客員教授
● 美術学部
日本画
町田久美

油画
オウ・ジュン、藏屋美香、塩田純一、松浦寿夫

版画
秋山伸、清水穣、鷹野隆大、三宅砂織

彫刻
北澤憲昭、須田悦弘、多和圭三、福永治

工芸
関井一夫、武田厚、八田雅博、藤田政利、ルパート・フォークナー

グラフィックデザイン
葛西薫、加藤久仁生、カリ・ピッポ、菊竹雪、佐藤可士和、竹中直人、津山克則、三浦武彦

プロダクトデザイン
アウグスト・グリッロ、岩佐十良、ヴァーリヘイ・ユディト、小倉ひろみ、廣田尚子、山中俊治

テキスタイルデザイン
相澤陽介、安東陽子、池田祐子、伊藤志信、上原利丸、鈴木マサル、須藤玲子、関島寿子、ヘレナ・ハイヴァネン、皆川魔鬼子

環境デザイン
青木淳、小泉誠、田根剛、団塚栄喜、中村好文、廣村正彰、藤江和子

メディア芸術
伊藤俊治、グリフィス・キオ、四方幸子

情報デザイン
上田壮一、小林章、西山浩平、暦本純一

芸術学
祖父江慎、本間孝、山梨俊夫

統合デザイン
佐々木正人

演劇舞踊デザイン
國吉和子、高萩宏、勅使川原三郎

● 大学院
沓名美和、馬越陽子、横尾忠則
（以上2023年4月1日付）

多摩美術大学 TUB

“まじわる・うみだす・ひらく”をコンセプトに、オープンイノベーションによる価値の創出、幅広い層に向けたデザインやアートのプログラムの提供、学生作品の展示・発信を通してデザインとアートの持つ創造性と美意識を社会とつなぐ場を提供しています。

港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー5F（東京ミッドタウン・デザインハブ内）｜11:00〜18:00｜日曜・月曜・祝日休館｜入場無料

7/9（日）ー29（土）

企画展「マテリアル・デザイン・クッキング成果報告展」

「マテリアル・デザイン・クッキング」は、CMTEL主催、東レ株式会社協力のもと行われた学生自由参加型ワークショップで、同社が開発したスエード調人工皮革「Ultrasuede®」の端材を自由に実験・加工し、その魅力を再発見していく実験的な取り組みです。6月20日に学内にて行われた成果報告会の作品を展示します。

多摩美術大学 アートアーカイヴセンター

本学に蓄積されてきた芸術資源を保存、管理、公開していく研究教育拠点として、2018年4月に設立しました。現在18の資料体を有し、授業での利用や、学生のみなさんの制作や研究に役立てる生きた教材とするため、各種資料を整理してアーカイヴを構築しながら公開しています。アートアーカイヴセンターウェブサイトで利用方法や動画などのコンテンツをご覧ください。

6/22（木）ー7/21（金）

多摩美術大学アートアーカイヴセンター所蔵資料展2　北園克衛文庫

「北園克衛Ⅰ 詩人のデザイン」展

戦前のモダニズム詩人として知られる北園克衛は、評論、雑誌編集、装幀、写真などの分野でも活躍し、1935年創刊の同人誌『VOU』の主宰を長く務めました。本学は1993年に北園克衛文庫を設立し、上野毛図書館にて、計3回の資料展を開催してきました。本展は、八王子キャンパス初の北園克衛文庫資料展となります。北園の生前の著作や装幀をてがけた書籍、直筆原稿、プラスティック・ポエム（写真作品）をご紹介します。

会場＝アートテーク2F 竹尾ポスターコレクションギャラリー

10:00〜17:00｜日曜日、7/17（月・祝）休場 ※7/16（日）は開館｜入場無料

同人誌
『VOU』
(1973-74)

アートテークギャラリー

八王子キャンパス内｜ギャラリー開場時間10:00〜17:00（展覧会による）｜日曜・授業日以外の祝日休場｜入場無料

＞ 最新情報は大学HPでご確認ください

9月上旬ー中旬

多摩美術大学助手展2023

9月中旬ー10月上旬

「秋山孝 in 多摩美」展

10/11（水）ー27（金）

「家村ゼミ展2023」展

アキバタマビ21

アキバタマビ21は、3331 Arts Chiyodaでの約12年間の活動を終え、現在移転準備中です。移転までの間、いろんな場所をお借りして、アーティストトークや展示設営にまつわるワークショップなど、さまざまなイベントを開催しています。

7/22（土）

アキバタマビ21移転プレイベント

これまでとこれから04

登壇アーティスト＝井上瑞貴、渡邊拓也

ファシリテーター＝山本浩貴

会場：YAU STUDIO（有楽町ビル10F）

EXHIBITION & THEATER

4/28（金）ー8/27（日）

WHAT MUSEUM Space 1, 2F

高橋龍太郎コレクション
「ART de チャチャチャ
—日本現代アートのDNAを探る—」展

日本画・岡村桂三郎 教授、町田久美 客員教授、彫刻・須田悦弘 客員教授、大学院・横尾忠則 客員教授、李禹煥 名誉教授

5/13（土）ー10/1（日）

ART DRUG CENTER

O JUN展
「脳天—1993 年の仕事から—」

油画・O JUN 客員教授

5/31（水）ー7/30（日）

京都dddギャラリー

葛西薫展 NOSTALGIA

グラフィックデザイン・葛西薫 客員教授

7/8（土）・9（日）
14（金）ー 30（日）

新国立劇場 小劇場

モグラが三千あつまって

演劇舞踊デザイン・近藤良平 教授（振付）

7/21（金）ー30（日）

吉祥寺シアター

FUKAIPRODUCE羽衣
第28回公演「女装、男装、冬支度」

演劇舞踊デザイン・糸井幸之介 准教授（作・演出・音楽・美術）、岡本陽介 非常勤講師（出演）、木皮成 非常勤講師（振付）、深井順子 非常勤講師（プロデュース・出演）

9/12（火）ー12/3（日）

東京国立博物館表慶館

「横尾忠則 寒山百得」展

大学院・横尾忠則 客員教授

9/16（土）ー12/4（月）

島根県立石見美術館

建築家・内藤廣／BuiltとUnbuilt
赤鬼と青鬼の果てしなき戦い

内藤廣 学長

9/20（水）ー10/30（月）

BUG

雨宮庸介個展「雨宮宮雨と以」

油画・雨宮庸介 非常勤講師

BOOK

インディジナス
先住民に学ぶ人類学

金子遊 著
（芸術学准教授）
平凡社
4月19日刊
3,080円（税込）

エコゾフィック・アート 自然・精神・社会をつなぐアート論

四方幸子 著（メディア芸術客員教授）
フィルムアート社
4月26日刊
3,300円（税込）

DESIGN SCIENCE_01

深澤直人 著（統合デザイン教授）、佐々木正人 著（統合デザイン客員教授）、中村寛 著（リベラルアーツセンター教授）、長崎綱雄 著（統合デザイン教授）、他
学芸みらい社
4月4日刊
4,400円（税込）

七十人訳ギリシア語聖書 ヨブ記

秦剛平 訳
（名誉教授）
青土社
6月26日刊
5,060円（税込）

多摩美術大学 広報誌「TAMABI NEWS」2023年7月6日発行 第32巻 第1号 通巻94号
発行：多摩美術大学 広報部 東京都八王子市鑓水2-1723 電話:042-676-8611（代表）